

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K06758

研究課題名(和文)戦後日本における世俗の慰霊空間の研究

研究課題名(英文)Research on Civic Memorial Spaces in Post-War Japan

研究代表者

戸田 穰(TODA, Jo)

昭和女子大学・環境デザイン学部・講師

研究者番号：00588345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代国家にとって、革命や内戦、対外戦争における多数の死者の慰霊は大きな責務である。本研究では、戦後日本における代表的な慰霊空間の成立過程を明らかにし、それらの記念性のデザインの特徴を分析することを目的とした。具体的には、慰霊空間のリスト化および類型化、重要な慰霊空間の個別調査、慰霊の建築家について調査した。重要な慰霊空間のうち東京都建立の戦没者慰霊施設(相田武文設計)、ならびに日本政府建立海外戦没者慰霊碑(菊竹清訓設計)については建築家資料の調査を実施し目録作成と記録化を行い、両者の慰霊空間の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慰霊は戦争だけの問題ではない。近年の度重なる自然災害や、日常的な交通災害などにおいても、慰霊は必要とされている。そもそも人は皆亡くなるのであるから、慰霊は日常とも地続きの問題である。このような社会的な要請がありながら、その空間のデザインについては国内のきわだった事例を除けばこれまで十分な考察がなされてこなかった。個人の内面における祈り(祈念)の感情だけでなく、社会の中でより公共的な記憶(記念)を実現しようとするとき、そこに集う人々を包摂する空間が重要になる。これまでに構想され、建設されてきた慰霊の空間について考察し、記念性の空間的な表現に注目することには社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：For modern nation-states, memorializing the large number of dead in revolutions, civil wars, and foreign wars is a significant responsibility. The purpose of this study was to clarify the process of establishment of representative memorial spaces in postwar Japan and to analyze the characteristics of their design of commemorative nature. Specifically, it involves listing and categorizing memorial spaces, investigating case studies of important memorial sites, and researching the architects of these memorials. Among the important memorial spaces, the Tokyo Metropolitan Government Memorial Facility for the War Dead (designed by Takefumi Aida) and the Japanese Government Cenotaph for the War Dead Abroad (designed by Kiyonori Kikutake) were catalogued and documented through a survey of architects' materials, and the characteristics of both memorial spaces were clarified.

研究分野：建築史

キーワード：戦後建築 慰霊 記念 建築資料

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近代国民国家の成立に際しては、革命・内戦や対外戦争における多数の死者を伴う。そのため近代国家建設は、死者のための慰霊空間の建設を必要とする。とくに世俗化の進む社会において慰霊・追悼・祈念に係る象徴的な空間を、宗教性によらずにいかに関表現するか、また近代主義の建築において象徴性をいかに関表現するかは重要な課題であった。慰霊一般、また記念碑一般については歴史学、社会学、文化資源学などの分野で本邦でも近年研究が大きく進められている。しかしながら建築分野においては、丹下健三設計による広島平和記念公園などのわずかな例をのぞいて、積極的には論じられてこなかった主題である。しかし戦後の復興計画や都市開発の中で建築家が手がけた慰霊空間は少なくない。

(2) いわゆる「さきの大戦」における慰霊の問題も靖国神社をめぐるたびたび争点となってきたが、一方で千鳥ヶ淵戦没者墓苑などの記念性について言及されることは少ない。また戦争に限らず、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの大規模自然災害による犠牲者を追悼する慰霊施設がいくつも建設されている。けれどもこれらの慰霊の空間に持続的な関心が寄せられているとはいえない社会的な状況がある。

## 2. 研究の目的

本研究では、戦後日本における代表的な近代主義による世俗的な慰霊空間の成立過程を明らかにするとともに、それらの現状把握を行う。またこれらの慰霊空間を建築意匠・都市計画の観点から分析することで、近代主義の建築・都市計画において象徴性がどのように計画され、具体的な空間・意匠として実現したのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

この目的のため、主要な慰霊空間のリスト化、慰霊碑・慰霊空間の類型化、重要な慰霊空間についての個別調査、慰霊の建築家論を4つの軸として研究を進める。調査は行政発行の資料と建築家資料による調査を中心とする。慰霊空間のリスト化・類型化については、総務省が提供する「全国戦災史実調査報告書」中、とくに「全国の戦災の追悼施設・追悼式」(平成22年度から26年度)を基本的な資料とする。その他、国立の国内外の慰霊碑・式典については厚生労働省提供の情報を基本情報とする。以上の情報をもとに、近代主義の慰霊空間のリスト化を行う。重要な慰霊空間としては、現管理者への聞き取りと、一次資料として建築家資料を出処とする建築家資料群を対象に資料を行う。

## 4. 研究成果

(1) まず戦後、日本国内に建設された慰霊空間の全体像を把握するための資料調査を行なった。上記研究方法に掲げた方法から、主要な慰霊空間のリスト化を行い、様式的な特徴から慰霊碑・慰霊空間を類型化して分類した。この重要な慰霊空間についての個別調査については、千鳥ヶ淵戦没者墓苑(東京都千代田区)、太平洋戦争全国戦災都市空爆死没者慰霊塔(兵庫県姫路市)、東京都戦没者霊苑(東京都文京区)について現管理者への聞き取りと資料調査を行った。とくに東京都戦没者霊苑ならびに硫黄島鎮魂の丘については設計者である相田武文氏の協力を得て聞き取りとともに資料調査を実施し、図面資料目録の作成と記録化を行なった(その後、建築家から金沢工業大学建築アーカイヴス研究所に寄贈)。また政府建立海外慰霊碑については設計者である故菊竹清訓氏の設計事務所の元所員に聞き取りを行うとともに、文化庁国立近現代建築資料館(NAMA)に寄贈された建築家資料の調査を実施。図面資料目録の作成と記録化を行なった。

(2) 相田武文氏設計の東京都戦没者霊苑については、資料中には実施案の他7案の図面が残されている。1987年に制作されたものだが、これらの計画案の異同から1980年代なかばに建築家が構想し得た、戦後の慰霊空間の再編の事例として歴史的な意義をもつものである。また表現性が重んじられた1980年代のポストモダニズム期において、慰霊という象徴的な空間表現を実現した代表的な事例としての重要性をもつ。

(3) 故菊竹清訓氏設計の政府建立海外慰霊碑については、上記NAMA所蔵資料には菊竹氏設計11基の慰霊碑のうち西太平洋戦没者の碑(パラオ共和国ペリリュー州、1985)を除く10基の図面群があり、資料点数は355点であった。本資料については『国立近現代建築資料館紀要』第2巻(2022)に「国立近現代建築資料館が所蔵する菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面

群について」を寄稿した。資料点数については慰霊碑ごとにばらつきがあったが、慰霊碑単体ではなく広場としての空間構想、日本への軸線など共通したコンセプトを認めることができる。本事業は 1 人の建築家が二十年以上にわたってたずさわったもので一連の作品群としても建築史上の重要性が認められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>戸田 穰、加藤 直子                                    | 4. 巻<br>2           |
| 2. 論文標題<br>国立近現代建築資料館が所蔵する菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について   | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>国立近現代建築資料館紀要                                  | 6. 最初と最後の頁<br>44～49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57514/namabulletin.2.0_44 | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                   | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|